

地方史と中野幡能

飯沼賢司

一昨年十二月三日、八幡信仰史の権威である中野幡能氏が他界された。宇佐の江須賀の生まれで、夏越し祭のときに生まれたところから、幡能の名が付けられたといい、八幡の申し子のような方である。氏は、東京大学で宗教史を学び、石橋智信、岸本英夫、宮地直一などに師事し、大学院では「八幡信仰」をテーマに選び研究生生活に入った。戦中は軍務に就き、研究を中断したが、戦後、大分に戻り、戦中から集めた史料に加え神宮文書の蒐集・整理を進め、研究を本格的に開始した。

昭和二八年、九州大学に東京大学から竹内理三教授（文化勲章受賞者）が赴任された。編年文書集『寧楽遺文』『平安遺文』を手がけた竹内氏は九州でも荘園史料叢書などの史料の翻刻に着手し、大分県でも『大分県史料』の企画が持ち上がり、高田真治、清原宣雄の援助の下、竹内理三、渡辺澄夫、富米隆などを中心に、編纂が進められ、戦前から中野氏が蒐集した宇佐関係の史料も公刊の機会を得ることになった。

これに合わせて、大分県地方史研究会も創設され、昭和二九年に創刊号が出された。中野氏もこれに「大宮司大神・宇佐氏の対立」という論考を出され、以後精力的に諸学会に論文を提出され、『大分県史料』の刊行とともに、宇佐八幡宮に関係する研究は急激に進んでいった。中野氏の研究は、『宇佐八幡宮の研究』（昭和三二年 豊日史学会）、『六郷満山の史的的研究』（昭和四一年 藤井書店）などで公刊され、昭和四三年には、『八幡信仰史の研究』として吉川弘文館から発刊され、新しい八幡研究の像が形成された。

地方史の初期の段階以後は、豊日史学の活動に専念し、次第に中野氏自身が『大分県地方史』の会誌に報告することはなくなったが、氏の出された八幡の歴史像はその後の研究者の研究目標となった。昭和五六年の大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗

資料館の開館は、それに大きな刺激となった。これ以降、地方史の紙面には、中野説を超えようという精神的な論が掲載された。

中山重記氏は常見名や岩崎荘などの研究、さらに弥勒寺領竈門荘の研究を行い、荘園研究の面から中野論を批判的に深化させた（地方史一〇二・一〇六・一〇九・一一二・一一四号など後に『宇佐八幡宮の研究』としてまとめられる）。また、松岡実氏は豊後大神氏が宇佐大神氏の流れであるという中野説を批判した論文を四回にわたって地方史の紙面に掲載した（地方史七九・一一一・一一六・一二一号）。ほかに、渡辺澄夫氏の薫陶を受けた乙咩政己氏の実証的研究がある。

その後は、竹内理三監修・中野幡能編の『宇佐神宮史』【第一巻刊行昭和六〇年】の編纂が開始され、宇佐神宮の境内発掘が始まると、八幡信仰に関する研究は、新しい段階に入る。発掘の前提作業として真野和夫氏による神宮所蔵の絵図の研究が行われ大きな成果を得た。また、風土記の丘の副館長・館長を務めた後藤正二氏編集企画による八幡小特集は新しい八幡の歴史像構築に大いに貢献した。その中には、昨年『八幡神とはなにか』（角川書店）を出した飯沼賢司の論文もあり、八幡研究は中野幡能氏の他界、地方史五〇年を経て新しい段階に入ったといえる。